

バウハウス(ベルリン)

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

新興勢力であったナチス党はデッサウで正当な選挙により、勝利を収めた。ナチス党は選挙公約としてバウハウスの解体をうたっていたので、1932年9月末にバウハウスは解体された。しかしバウハウスの名声は全国に広がっていたので、マクデブルグ市、ライプツヒ市などから移転の誘いはあった。既に校長ミース・ファン・デル・ローエは社会民主党が勢力を持っていたベルリンに土地を調達しており、そこへの移転を決めた。ベルリン市のシュテータグリッツ (Steglitz) にあった使用されていない工場を買収したのであった。

1. バウハウス、ベルリン校

バウハウスがヴァイマルでスタートした時は国立学校で、デッサウに移転した時はデッサウ市立学校であった。それぞれ十分ではないにしろ公の学校運営費が出されていた。しかしベルリンへ移転するや、公的な運営費は無くなってしまった。ミースは授業料の値上げや、バウハウスが得てきた特許料の収入、デザインを会社に販売したり、民間企業と共同で製品を製造する事で利益を得て、学校運営を行った。ベルリンへ移転した日は1932年10月末であった。その頃すでにヒトラーが率いるナチス党はベルリンにおいても勢力を増していた。1933年1月30日に正当な選挙により勝利を得たヒトラーは内閣を樹立し首相に就任する。そしてその年の2月27日の夜に国会議事堂が炎上するという事件が起きた。これをヒトラーは共産党が放火を行ったとして共産党の弾圧に乗り出した。国会議員を初め、多くの公務員も逮捕された。

現在のベルリンの国会議事堂の前にはこのような事件を含めてナチスにより処刑された元国会議員を悼むメモリアルが建っている(写真1)。

ヒトラーは1933年2月1日に「国民への呼びかけ」で「わが民族の精神的、意思的な一致」を呼びかけドイツを

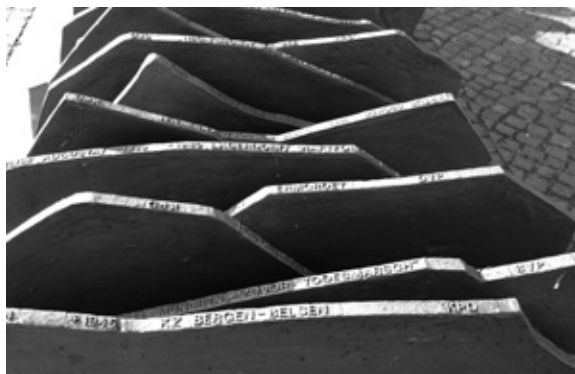


写真1 ドイツ連邦共和国議事堂前に建つナチスにより処刑された国会議員の碑

再建する「国民革命」と名づけドイツ国民を煽った。国会放火事件で共産党を弾圧し、3月には「全権委任法」を成立させ、社会民主党も活動を禁止させられた。他の政党はナチス党に吸収されるか解散せざるを得なかった。こうしてナチス党以外の政党の存在はありえなくなった。このような状況の中でバウハウスベルリン校は私立学校として再スタートを切ったのである。校舎はミースが調達したベルリンのシュテータグリッツ (Steglitz) 地区にある使用されていない電話機製造工場であった。この事をベルリン毎日新聞 (Berliner Tagesblatt) は1932年10月に「ベルリンにバウハウスがやって来る」と報じている(図1)。



図1 ベルリンにバウハウスがやって来ると報じたベルリンの新聞記事⁴⁾

ミース・ファン・デル・ローエは政治的中立を保とうと努力した。しかしバウハウスの中にも共産党員はいたし、またナチス党から学校運営者を入れるべきと主張する教員もいた。「カンディンスキー、ヒルバースマイヤーら主要教員はアーリア人でないの



図2 バウハウスに家宅捜索が入ったと報じるベルリンの新聞⁴⁾

で追放するように」とナチス党から勧告を受けるようになった。事実1933年4月にはバウハウスの中に共産党の細胞がいるとの事で、警察の家宅捜索を受けるようになる。この家宅捜索を1933年4月12日のベルリンの新聞は報じている(図2)。この事により一般のベルリン市民はデッサウからやって来たバウハウスは危険な存在とも映るようになったのである。またこの新聞記事を見ても分かるように当時は一般の印刷文字はひげ文字^{註1)}が使用されていた。それに対し前報で報じたようにバウハウスで使用された文字は同じ幅で文字を描くという極めて改革的な表現であったのである。バウハウスが国際化を目指していたことがこの事からも窺われる。

2. バウハウスベルリン校における教育

このような困難な中にあってもバウハウスの教育は行われた。現在ベルリンのバウハウス記念館(Bauhausarchiv)に保存されている学生たちの作品を紹介する。バウハウス記念館はグロピウスとTACにより設計がおこなわれたが、実際に建設されたのはグロピウスの死後である1976年から78年にかけてである。この記念館ではバウハウスの作品の展示を行っている(写真2、写真3)。所在地はKlingelhöferstr. 14, 10785 Berlinである。

ヘルマン・フィッシャー(Hermann Fischer)は塗料工場ベルヴィーネ(Veluvine)社の展示会場におけるブースの透視図を残している。1933年の作品である(図3)。またルドルフ・オルトナー(Rudolf Ortner)はカートン紙の上にパステルで描いた「雲の中の満月」を残している。1932年の作品である(図4)。ナチス親衛隊がベル



写真2 バウハウス記念館(ベルリン) グロピウス設計



写真3 バウハウス記念館(ベルリン) グロピウス設計

リンの町を行進する軍靴の音が聞こえだした、怪しく、危ない時代を絵画に表したものであろう。ヴェルナー・ドレヴェス(Werner Dreves)は硬質繊維板の上の油彩、「攻撃」を残している(図5)。1932年の作品である。ピウスパール(Pius Pahl)はマイスター(棟梁)シェパー(Scheper)^{註2)}の指導の下「色彩研究の家」(Farbstudie Haus)という作品を残している。1931年から1932年にかけての作品である(図6)。塗料工場ベルヴィーネ(Veluvine)社の展示会場におけるブースの透視図を残したヘルマン・フィッシャーはバウハウステーブル掛けの見本(各種の色彩)を残している。1932年の作品である(図7)。ゲアハルト・ヴェーパー(Gerhard Weber)はファン・デルデン社(van Delden)が製造するテーブル掛けのデザインを2種類手がけている。共に1933年の作品である(図8)。バウハウスはメーカーであるファン・デルデン社と売上金の数パーセントをバウハウスが得るという契約を結んだのである。ゲアハルト・カドウ(Gerhard Kadou)はシリー・ライヒ(Cilly Reich)^{註3)}の指導により、各種色彩のカーテン地を残している(図9)。しかしこれはメーカーとの契約に至る前にバウハウスが解散をしてしま

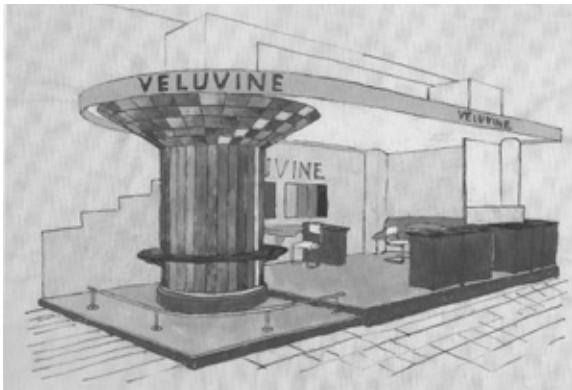


図3 ヘルマン・フィッシャーの透視図⁵⁾



図4 ルドルフ・オルトナーの「雲の中の満月」⁵⁾

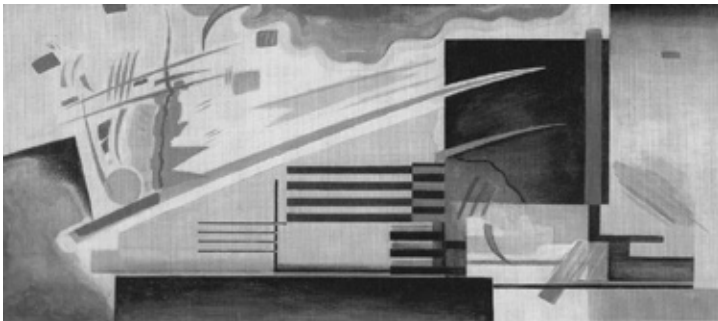


図5 ヴェルナー・ドレヴェスの「攻撃」⁵⁾

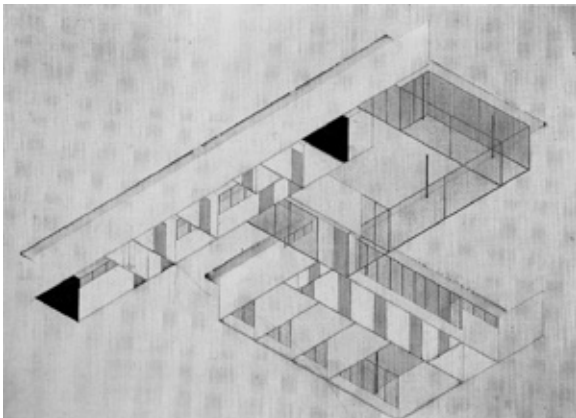


図6 ビウス・パールの「色彩研究の家」⁵⁾



図7 ヘルマン・フィッシャーの「バウハウステーブル掛けの見本」⁵⁾

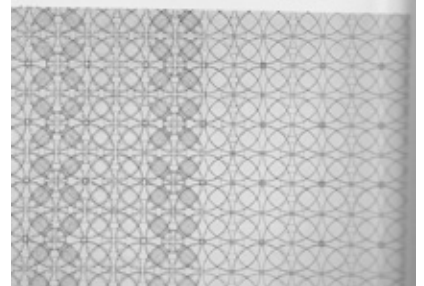
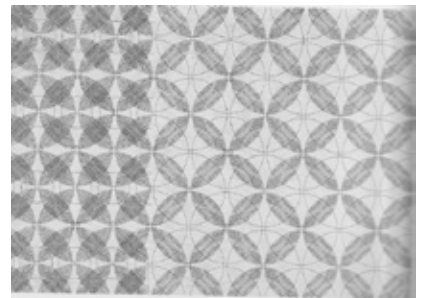


図8 ゲアハルト・ヴァーバー「テーブル掛け」⁵⁾

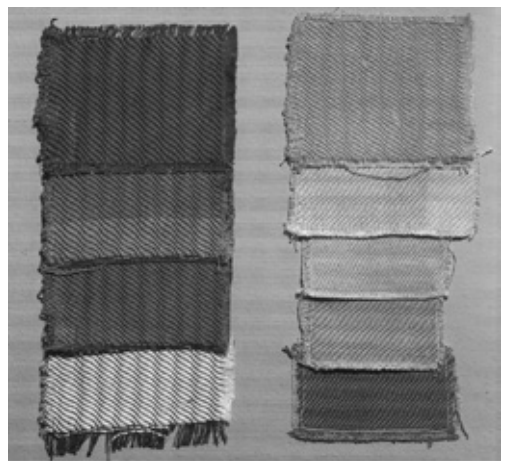


図9 ゲアハルト・カドウ「各種色彩のカーテン」⁵⁾

宙に浮いた存在となった。このような契約はファン・デルデン社のみならず、照明器具メーカーであるベルリンのシュヴィンツァー・グレフト社(Fa.Schwintzer Gräft), オスナブリックの壁紙メーカー、ラッシュ兄弟社(Fa. Gebr. Rasch)とも契約が行われ、私立のパウハウスの運営費を補てんする事となった。また企業の為にポスターや商標のデザインを行い収入となった。パウハウスはデッサウ時代から模倣を恐れ、デザインの特許申請も積極的に行っており、これも学校運営に寄与した。しかし提携企業の倒産などもあり学校運営は厳しさを増した。

3. パウハウス解散

このような政治的な弾圧、学校運営の経済的困難があり、校長ミースは万策尽きてしまった。ミースは主要メンバーを集めて会議を開き1933年4月12日にパウハウスを解散している(図10)。

当時建築家を目指していたエルンスト・ロイス・ベック(Ernst Louis Beck: 1908~1957)はデッサウ校でもヨハネス・イッテンの教育を受け、パウハウスに長く学んだ学生であった。後に芸術家として活躍するが、ベック



図10 パウハウスを解散する
ミース・ファン・デル・ローエ⁴⁾



図11 パウハウスを去る
学生ベック⁴⁾

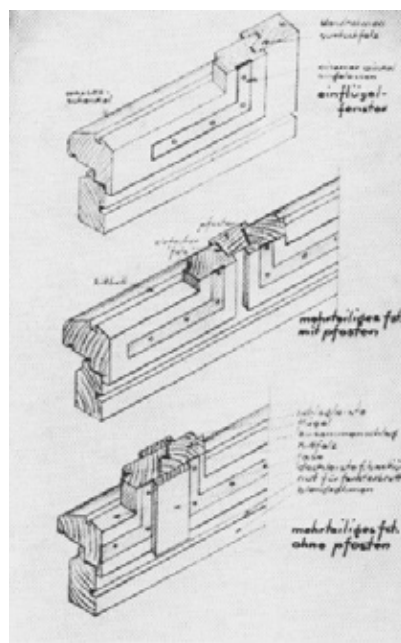


図12 ベックが描いた窓枠詳細図⁵⁾

がパウハウス解散に呆然とした姿でパウハウスベルリン校を立ち去る写真が残っている(図11)。ベックの学生として製作した建築図面も残っており、非常に精巧な詳細図などを描いていたこと、ナチスの台頭というパウハウスにとっての非常時にもかかわらずしっかりした教育が行われていたことが窺われる。ベックが描いた窓枠の詳細図を図12に示す。これはミース・ファン・デル・ローエの指導の下に行われた構法(Ausbau)の授業における作品である。またベックが描いた小規模住宅の1階平面図を図13に示す。これは構造計画(Konstruktiver Ausbau)の授業における作品である。パウハウスベルリン校のあった場所には現在も小さな工場が建っている。この住所はBirkbuschstraße49- Steglitz Berlinである。そこにパウハウスがあったことを示すベルリンの記念碑が掲げられている(写真4)。ここには「ここに1932年から1933年の間、パウハウス ベルリンの建物が存在していた。1919年にヴァイマルでヴァルター・グロピウスにより創立され、デッサウで造形大学として発展したパウハウスは1920年代から造型と建築学の国際的な道を目指していた。最後はミース・ファン・デル・ローエにより導かれたが民族社会主義者(ナチ)の弾圧により1932年にデッサウから移転し、1933年にここシュテューグリッツで閉校となった。多くの同志は迫害を受けたり、亡命をした。」と記されている。

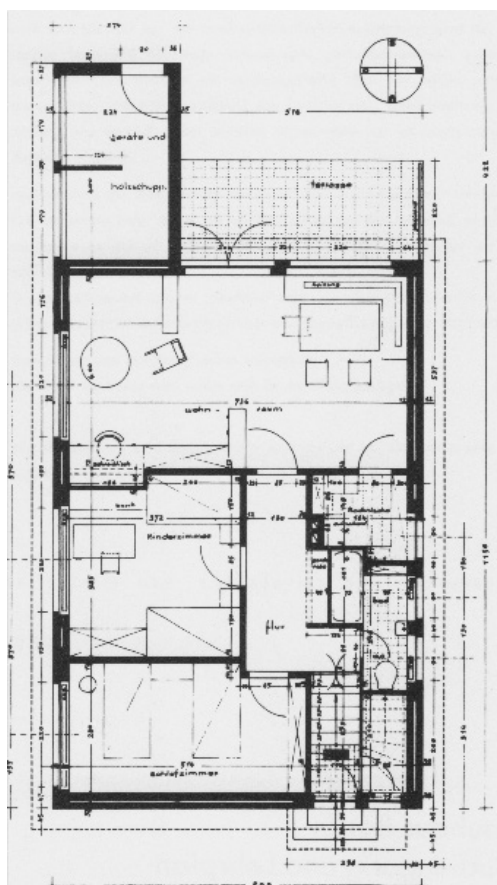


図13 ベックの作品「小住宅の平面図」⁵⁾



写真5 ミース・ファン・デル・ローエの家の看板
(Oberseestraße 60, 13053 Berlin)



写真6 ミース・ファン・デル・ローエの家はドイツの重要記念建築物



写真7 ミース・ファン・デル・ローエの家(庭側から見た住宅)



写真8 ミース・ファン・デル・ローエの家(住宅から見た庭園)

写真4 パウハウスがここにあった事を記すメモリアル
(Birkbuschstraße 49 Steglitz Berlin)



4. ミース・ファン・デル・ローエの家

ミース・ファン・デル・ローエはパウハウス校長時代、1933年にレムケ夫妻(Karl und Martha Lemke)の為に住宅を建設している。これは旧東ベルリン地区のオーバーゼー(Obersee)という湖に面して建つ平面がL字型の平屋住宅である。「シンプルが一番美しい」と言うミース・ファン・デル・ローエの信念に従って設計されたものである。レンガ造で大きなガラス窓が使用されている。このガラス窓は主に広い庭園に向かって開放されている。庭園はカール・フェルスター(Karl Foerster)により設計され、

主に芝生を植えた樹木の少ないシンプルなものである。住宅から庭園は緩い勾配で下がり、オーバーゼーに接している。東西冷戦時代に侵入してきたソ連軍に接収され、また旧東独の国家公安局(Staatssicherheitsdienst der DDR)に渡された。そして洗濯工場、車庫として使用されていた。1990年にこの住宅はレムケ氏からベルリン市へ寄贈され、今日に至っている。この住宅にはミース・ファン・デル・ローエ並びにパウハウスの女性マイスター(棟梁)であったリリー・ライヒ(Lily Reich)が設計した家具、調度品が残っており、これもベルリン市の工芸博物館に寄贈された。この住宅は現在ミース・ファン・デル・



写真9 ジーメンスシュタットの集合住宅(グロピウス設計：ユネスコ世界文化遺産)



写真10 ジーメンスシュタットの集合住宅(グロピウス設計：ユネスコ世界文化遺産)

ローエの家と呼ばれ、芸術関係の展覧会場などとして利用されている。写真5に住宅前に立つ「ミース・ファン・デル・ローエの住宅」の標識を示す。この住宅の所在地はOberseestraße 60, 13053 Berlinで、標識の60という数字は住宅番号である。この住宅はドイツの重要記念建築物に指定されている。この標識が住宅に取り付けられている(写真6)。写真7は庭側から見た住宅である。写真8は住宅から見た庭園である。大きなガラス窓が庭に面する外壁に使用されている。

5. パウハウスを去ったヴァルター・グロピウスとミース・ファン・デル・ローエ

5-1 ヴァルター・グロピウス

初代校長のグロピウスは様々な苦難を抱えて1928年に「私は別にやりたい事がある」と言い残しパウハウスを去っている。パウハウスを去った後、グロピウスは1929～1934年にベルリンの大住宅団地ジーメンスシュタット(Siemensstadt)の中のユンフェルンハイデヴェーク(Jungfernheideweg)に大型で白色の集合住宅を建設している。これはあたかも大型の商船のように見える。(写真9、写真10)そしてこの住宅団地は2008年にブルーノ・タウトがベルリンに残した4つの住宅団地と共に「ベルリンのモダニズム」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。

1934年一旦英国に亡命し、1937年にハーバード大学から招聘を受けこれを受諾している。ここでペイ・フィリップ・ジョンソンら有名建築家を育てた。一方で共同設計事務所TAC(The Architects Collaborative)を設立し超高層ビルのパナナムビル(現在メットライフビル)(図



図14 超高層ビル「パナナムビル」

14)を設計し話題を呼んだ。1911年の作品アルフェルトのファークス靴型工場で始まったこのようなガラス建築が現在の世界の主流となっている。米国に亡命をしても故郷ドイツのベルリンを忘れる事のなかったグロピウスは第二次大戦後1952年にベルリンのハンザフィアテルで行われた国際建築展に参加し、そのほぼ中央部に高層の集合住宅を実現している。これは円弧の一部をなす形をしていて極めて特徴のある建築である。パウハウス時代の色彩の配慮もうかがわれる(写真11)。このハンザフィアテル地区の国際建築展とは第二次大戦で疲弊した



写真 11 ハンザフィアテルの集合住宅・グロピウス設計

図 15 グロピウスシュタット¹⁰⁾

ドイツの建築技術を一気に取戻し、復興に役立たせようと試みたもので、グロピウスのほか、ル・コルビジエ^{註4)}、マックス・タウト、オスカー・ニーマイヤー、アルネ・ヤコブセン、アルヴァー・アアルト、エゴン・アイアマン等有名建築家が参加した。グロピウスは1960年にベルリンの南部ノイケルン (Neukölln) 地区のブッコウ (Buckou) とルドウ (Rudou) にグロピウス・シュタット (Gropiusstadt) と呼ぶ266haに及大住宅団地を実現している(図15)。1969年米国のマサチューセッツ州ケンブリッジで死去した。

5-2 ミース・ファン・デル・ローエ

1933年にバウハウスの解散を決定したのち、米国へ亡命をしている。1938年から58年の間シカゴのアーマール大学(後のイリノイ工科大学)建築学科の主任となった。同大学のクラウンホールを初めキャンパス計画を手掛けた。1950年にイリノイ州に建てたファングワース邸も代表作の一つである。ガラス張りの超高層建築も多数手



図 16 シーグラムビル



写真 12 国立美術館・新ギャラリー・ミース・ファン・デル・ローエ設計

がけ1958年竣工のニューヨークのシーグラムビルは最も優れたデザインの超高層ビルと言われている(図16)。1968年には母国のベルリン(当時は西ベルリン)にガラス張りの国立美術館・新ギャラリーを建設した(写真12)。当時は断熱性能に優れた窓ガラスがなく、このような建物ではコールドドラフト¹⁾が問題となった。筆者は1971年から1973年の間ベルリン工科大学ヘルマン・リーチェル研究所に留学していた。同研究所はこのコールドドラフト^{註5)}を解決する委託研究を受けていた。これを同僚のベルント・クリーゲル (Bernd Kriegel) 氏が担当し、室内外温度差とガラス面積によるコールドドラフト量の

計算、コールドドラフトを相殺するための窓際の放熱器の設置方法と放熱量等を研究していた。クリーゲル氏は時々筆者を現場に連れて行ってくれたこともあった。筆者にとってはベルリンに数ある有名建築物の中でも特に思い出の深い建築である。この研究結果は同氏の博士論文となった。現在は同氏の息子であるマルチン・クリーゲル(Prof. Dr. -Ing. Martin Kriegel)氏がヘルマン・リーチェル研究所の教授になっている。まさに隔世の感である。

おわりに

1919年にグロピウスを校長とし、素晴らしい教授陣を揃えてスタートしたバウハウスであったが、ベルリンで1933年にわずか14年の歴史を持って閉鎖されてしまった。この間に多数の有能な人材を輩出し^{註6)}、卒業生はドイツのみならず世界の建築界、芸術界に影響を与えた。

バウハウスの歴史はまさに時代に翻弄されたものであった。ナチス政権を逃れて日本に亡命のような形でやってきたブルーノ・タウトは1934年6月1日の日記に「近頃の世界を風靡している軍国調のすさまじさはどうだろう。絶対的服従を強いられているとはいえ、ドイツの建築家協会だってこれに調子を合わせているではないか、そんな風だから一般民衆までが大勢に巻き込まれてただもう感激に酔っているのだ。いまに精神労働者までが、隊伍を組み文筆を揮ってこの風潮に同調する時が来るに違いない」と記している。69年前の敗戦の日を想い、蘊蓄のある言葉である。

註

- 1) ドイツ文字、亀の子文字、亀甲文字とも呼ばれるファラクテッア(Fraktur)書体である。ナチス時代にはこの書体がドイツの、アーリア的であるとして全面的に使用された。バウハウスは他の西欧諸国にも分かりやすいバウハウス文字を使用した事もナチスの批判を受ける原因となった。
- 2) ヒネルク・シェパー(Hinnerk Scheper, 1897~1957) 彩色技術者、塗装職人、文化財保護士。オスナブリュックの郊外、ヴルフテン生まれ。職人教育を受け、さらにデュッセルドルフの工芸学校と芸術アカデミーに1918年から1919年まで学んだ。1919年から1922年まで学生としてバウハウスに在籍した。ヨハネス・イッテンとシュレーマの指導の下、壁装工房で学び、クレアの授業を受けた。ヴァイマルの城館内博物館をはじめ様々の建築物の色彩調節、塗装を行った。1925年から1933年までバウハウスの壁装工房主任。そのかわり各地の有名建築の塗装、修復工事に従事。モスクワにわたり、建築の色彩に関するアドバイザーとして活躍。一方写真撮影を行いポライターの仕事も行った。1934年以降はベルリンでフリーのカラーコーディネーターとして活躍。ベルリン市の文化財保護委員、さらに文化財保護局長を務める。ベルリン工科大学で文化財保護の講義を担当した。
- 3) リリー・ライヒ(Lily Reich, 1885~1947) ベルリンで生まれた。高等学校卒業後、機械刺繍の教育を受ける。1908年にウー

ン工房のヨーゼフ・ホフマンのもとで勤務。1911年ベルリンへ戻り、1912年ドイツヴェルクブンドに入る。1920年に女性で初めてドイツヴェルクブントの理事になった。各地の展覧会設営などで活躍。1927年ドイツヴェルクブントがシュツットガルトで開催した住宅展(ヴァイセンホーフジードルング)展示住宅の内装を担当。1932~1933年バウハウスの内装部門主任を務める。1945年以降ベルリンに建築、デザイン、布地、モードのアトリエを開く。1945/46年ベルリンの造型芸術大学で教鞭を取った。ベルリンで死去。

- 4) コルビジェが提案した集合住宅は規模が大きすぎ、ハンザフィアテルの敷地に入りきらなかった。ベルリン市のオリムピクススタジアムの近くに建設され、現在も威容を誇っている。所在地はCharlottenburg, Heilsberger Dreieck, Berlin. 建設年は1957/58
- 5) Cold Draft, 冬季に室内に低温の気流が流れ込むか、ガラス窓などの冷壁面で冷やされた冷風が下降する現象。冷風はさらに床面を流れるので、居住者に不快感をもたらす。
- 6) バウハウスが輩出した人材は多すぎ、誰を代表と言って良いか分からない。筆者が一人を選ぶならエルンスト・ノイフェルト(Ernst Neufert, 1900~1986)をあげる。ノイフェルトは第一期の入学生である。ノイフェルトはドイツのフライブルクで生まれた。5年間煉瓦積職人の仕事をしたのち、17歳でヴァイマルの建築施工学校に入学した。その教師に勧められ、1919年バウハウスの第一期生として入学、グロピウスに師事する。1920年にスペインに行き、アントニオ・ガウディと交流を持つ。1921年再びバウハウスに戻り、グロピウスのもと、主任建築家となる。1924年アリス・シュピース(Alice Spies)と結婚、4人の子供を授かる。1925年にはグロピウスと共に仕事をし、デッサウの新しいバウハウスやバウハウス教師館の設計に従事する。ベルリンでバウハウスが閉鎖されるとヨハネス・イッテンがベルリンで開いていた建築と芸術の学校イッテン学校の教員となる。一方それまで収集してきた建築の図面、データ等を編集し1936年に建築設計教本“Bauentwurfslehre”という本を出版する。これが話題になり、たちまち18ヶ国語に翻訳された。これはわが国の日本建築学会が編集した「建築設計資料集成」(丸善)のタネ本ともなった。この31版は和訳が行われ、「ノイフェルト・建築設計大辞典」という標題で吉武泰水総括のもと1988年に彰国社から出版された。筆者も翻訳の手伝いをさせて頂いた。1936年渡米しフランク・ロイド・ライトに会い仕事を求めようとする。しかし既に米国でもノイフェルトの著作は名声を博しており、第2版を出版の為にベルリンに戻る。ナチス政権下ではヒトラーの右腕としてゲルマニア計画を行っていた建築家アルバート・シュベアに呼ばれ、ドイツ工場建築の標準化の作業を担当する。また建築に関するドイツ工業規格(DIN)作成に尽力した。戦後はダルムシュタット工科大学の教授に就任、さらに子息のペーターと協同の設計事務所を開設した。ドイツ連邦共和国大功労賞受賞。晩年は専ら著書、建築設計教本“Bauentwurfslehre”の改定作業に従事した。スイスにあった自宅で死去。

〈参考文献〉

1. 田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト—人とその時代、建築、工芸— オーム社
2. 田中辰明「ブルーノ・タウト・・・日本美を再発見した建築家」中公新書2159
3. 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
4. Magdalena Droste, Bauhaus 1919~1933, Taschen
5. Bauhaus Berlin Archiv/Berlin, Bauhaus Berlin Weingarten
6. Magdalena Droste "Bauhaus" Taschen
7. Ute Ackermann, Die Meisterratsprotokolle des Staatlichen Bauhauses Weimar 1919 bis 1925 Verlag Hermann Böhl aus Nachfolger Weimar
8. 田中辰明「バウハウス(ヴァイマル)」月刊建築仕上技術2014年8月号、工文社
9. 田中辰明「バウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年9月号、工文社
10. Kiepert KG Berlin, Die Gropius Stadt Verlag Kiepert KG Berlin 1974